

P4C 研究会 2017・3・18

日時：2017年3月18日 午後5時半より

場所：大阪大学中之島センター605

参加者：小学校教員2名、中学校教員1名、大学教員2名、社会人3名

- 自己紹介

- P4C を用いた小学校図工の授業の分析。応用哲学会で発表予定。
見ることのできない心の思いを描くという図工のテーマ。
2時間使って、子どもたちはこのテーマに沿って自分の絵を描く。
3時間目に、子どもたちの絵の中から3作品を選び、それに関してP4Cの授業を実施。
4時間目には改めて自分の絵を描く。

- なぜこの授業を応用哲学会で発表するための題材としたか。
M・リップマンはP4Cにおける思考として、批判的思考、ケア的思考、創造的思考の3つをあげているが、前2者については具体的な議論をしているが、3つ目の創造的思考に関しては、必ずしも明確に説明していないように思われる。そこで、図工あるいは美術とP4Cとの関係を反省すれば、創造的思考に関する具体的なイメージを持つことができるのではないかと考えた。

- 授業記録は、4クラスある内の1つのP4Cの記録である。
先ず、3つの作品を描いた人に、テーマを言ってもらおう。
1人(F)は、闇
2人目(SA=F14)は、迷い
3人目(O)は、対立
次いで、それぞれの作品について子どもたちの印象を聞く。

Fの作品をめぐって

S3: 真ん中に描いてあるのがクラゲ。闇は深海を想起させる。深海がその闇の深さを表している。

S4: 闇は普通、紫とか黒をイメージする。闇を深海として描いているので、紫とか黒ではなくて、工夫がある。

T: S4の発言を受けて、Fの作品には表現に工夫がある。このことについて隣と人とか他の人と話を広げてくれるように促す。

コメント：作品をどう思うかということが発言するよりも、作品を一層良く見るという行為が促される。友だちの作品について創造／想像力を働かせて作品をよく見て考える。

S8：クラゲは下には毒があり、それが闇だとしても、クラゲの上には毒がないので、上には星が描いてあり、優しさのようなものを描いているという印象。

S11：Fの作品について。黒を塗りつぶすのは、ただ真っ黒なイメージ。その中に黄色を入れてそれを塗りつぶせば、闇は引き立つのではないか。

S14(SA)：Fの作品のクラゲは一匹しかいなく、悲しそうだ。

S15：真ん中のクラゲはプランクトンで、自分をコントロールできない。海水の流れに身を任せている。それが深海の闇と重なっている。

S2：闇を引き立てている工夫が2つぐらいある。1つは工作しているとき、ナイフでブスブスと刺していたが、それは乱雑な心を表し、もう1つは、星を自分の心の光にたとえていて、黒で塗りつぶしているのは、悪い方に染まっているという闇を表している。クラゲが1匹ということは、孤独で闇を表している。深海も闇なので、作品全体が闇というイメージ。

S16：闇というよりも楽しい感じがする。星がいっぱいある。いっぱいぶつぶつもある。スパッタリングという表現で水色もある。周りには黄色もある。点々は星のように見える。

S12：星の部分は青でつぶしているから、やはり闇。光（星）が周りの人だとすると、それを塗りつぶしているの、孤独を表し、それが闇に繋がっている。

S10：孤独の人はいじめられていて、そのいじめから光が助けてくれる。

S4：S16の発言を受けて。明るいところも見えるので、闇は闇でも本当に深い闇ではなくて、明るい闇、薄い闇という感じ。

S1：孤独であっても、それを包んでくれる人がいて、それを無意識に表している。

今までの議論を受けて、Fが自分のことを話し始める。

F：小さい頃からクラゲが好き。クラゲはすごく明るくて楽しい。S4の明るい闇という言葉に反応して、闇が少し浅いと言う。作品は、光から落とされて、あの闇に入っていたということ表現。クラゲはもともと2つあって、1つは自分で、もう1つは好きな人だったけど、その人と別れなければいけなくなった。星（光）があったが、その星は全部つぶされて、すごい闇に包まれている。しかし、最近この物語に続きがあり、その人とまた出会うことができ、自分は幸せである。そのことをまた絵に描きたいと思っている。

ここで、教師は図工の話しに戻し、作品で用いられている技法から読み取れることを言えるかを尋ねる。例えば、F が語ってくれた言葉は絵には書かれてはいない。ということで、色、形、材料、描き方など表現技法からどんな思いを読み取ることができるか。このことを通して次の作品づくりに生かす。

S17：いろいろな色は、その人の心を著している。

闇というテーマをもつ F の作品に議論が集中していくが、子どもたちは 11 月というこの時期は進路のことなどで、心に闇を抱えている状況があるといえる。

SA の作品をめぐる

S9：SA の作品に言及。自分だったら迷いは暗い色を使って描くけど、SA は明るい色をたくさん使っている。

S1：迷うときには明るく振る舞う。そういうことかもしれない。

教師の提案を受けて

S2：まよい。SA の作品はいろいろな色が混ざり合って、難色にも染まっている、どう行動すべきかわからなくて、一つに染まっていないので、迷っているのではないか。

S13：色がかすんでいるところが迷いのように見える。

S11：いろいろな色を使っているのが迷いを著し、真ん中に土が置いてあるのは、そこから迷いが出ている。

T：黄色に塗ってあるところに花が入っている。そして黄色に濃淡をつけて、同じ色を重ねている。これをどう思うか。

S12：同じ色で花が描かれている。同じ色のものが助け合っている感じ。花と花が助け合っている。

SK（作者）：よくわからない。絵具を見て、何も考えないで描いたのがこの作品。これからどうなるかわからない。

⇒SK は自分の作品を何も感がないで描き、題名は「迷い」としているが、以上の議論を経て、絵はどのように変化したのか。

O の作品をめぐる

F：O の作品について。白と黒という反対の色で対立を表しているが、白と黒の間に黄色がある。これが不思議。人間の心の対立は白黒では表せなくて、複雑であり、色が混じり合っている。

S10：O の作品について。絵の 3 分の 1 を占める黒の部分が、内面の気もちを表す。

S4：黒が白に飛び出している。黒が白に立ち向かっている。

S9：白と黒と黄色は3人の象徴。白と黒が喧嘩して黄色が仲直りさせる。

S3：白が内面で、黒が自分の心の真ん中。白黒の境目が、自分の体、裏と表の境目。黒が白の方に出てきているのは、自分の心が外に出てきていることを表す。

S12：黄色は友だちとか家族を表している。

S13：白い、純粋な心が黒い変な心になり始めている。

⇒Oはなぜ「対立」という題の絵を描いたかの説明はなかった。しかし、Oの作品をめぐる議論は、「対立」をめぐる形で絵の解釈をしている。Oはその後どのような絵を描いたのか。

S4：Oの作品で、まよい、心の中を複雑に描いてあり、いろいろな色を取り入れている。教師の提案を受けて

S5が発言。

S1：黒が攻めているイメージ。黄色がその黒の勢いを止めて、冷静になれる。

展開

T：議論を受けて、自分が新たに絵を描くのに、これは使えるといった発見があったか尋ねる。

S2：SKの技法を真似したい。自分がさっき直感で思ったのは同じ人の中でも隠された花のようなもの、隠された本当の才能みたいなものを描いたような気がしてきた。その隠された何かを前に描いた絵に付け加えたい。⇒どうなったか。

S4：自分の絵は完成されたものと思っていたが、Fの技法や、SKの工夫、Oのものも含めて工夫をしたい。⇒どうなったか。

S11：「太陽」とう題の絵を描いたが、Fの作品を見て、形で表すということを学んだ。これまで「四角」で描いていたけど、形を考えていけば、表現がもっと深くなるとおもった。⇒S11の作品は大きく変貌。形だけでなく、「闇」という言葉にも触発されている。

S12：「悩み」という題の絵だったが、そして色だけで「悩み」を表そうとしたけど、Fの形の工夫とかを見て、それを参考にしたい。⇒どうなったか。

⇒3つの作品の議論を通して、それぞれが想像力／創造力を触発されて絵を描きなおしたいと思っている様子はみてとれる。

更に、作品に大きな変化がなかった子の例はあるか。その場合、その子の作品に対する議論はどのように展開されたかは言えるのか。

○ 一般的な質問として、図工あるいは美術とP4Cはどう関わるのか、ということが

話題となった。美術教育の指導要領では「対話」が常に強調されている。その「対話」は作品との対話ということであろうが、作品をめぐる他者との対話をとうして、鑑賞という点では作品との対話が深まり、創作活動という点では、自己との対話が深まり、作品への想像力／創造力が育成されることになろう。

- 研究会の後、大畠先生の歓送会。